両親の行動映像

室谷幸吉

明子の母親はニワトリが大きらいだという。ニワトリのあのハネを見るとゾーッとする。ニワトリが生んだ卵の方はまあガマンして料理に使うが、それも卵のカラにシミがついていたり、うす汚れたりしていると、もういけない。そこでお店で買う時に、よごれのないキレイなのを、一粒選りしてもらう。

ニワトリに限らず、鳥類一般、ハネのあるものが恐ろしいのだ、という。スズメが部屋にとびこんできたことがあるが、その時など、何事が、と思うほどの悲鳴をあげ、とどのつまりは、近所の子どもをつれてきて、つかみだしてもらった。ニワトリを夫が風呂の湯につっこむ夢を見て、大きな声で叫び、自分の叫び声で目をさます。

この母親の追憶によると——生れ土地の風習で、正月のお雑煮にカモの肉を入れる。そのカモがである。首をひねられてハネつきのまま足をヒモでしばられる。そして台所かなんかにダラリとぶらさげられているのを見て、イヤだなあと思った。そのゾーッとした幼時の印象が、今もあざやかに記憶に残っていて、頭から消えていかない。ねじれてダランと垂れた首、それからむきだした白っぽい目——おそらく、この強烈な幼時期の印象が、鳥類一般への恐怖（ハネ恐怖）に拡大したそもそもの原因にちがいない。「それでいて、ヘビや毛虫やカエルなんかは、平気、ナンともないんですがネエ。ヒトがヘビだといって大さわぎするのがフシギですわ」と明子の母はうすく笑う。

この母親に右へならえ、で長男も母そっくりの鳥ぎらい。その妹も生き物ぎらいの傾向が目だつ。二人っきりの兄妹なのだが、申し合わせたように二人とも、生き物に対しての拒否感情が強い。

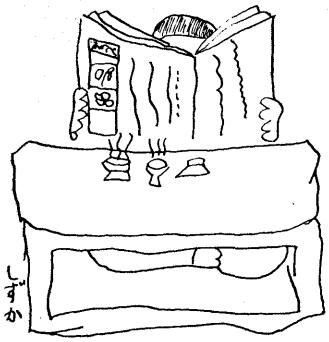
このように親の傾向（嗜好や性癖その他）がそのまま子どもにひきつがれることが多い。親が、行動面で、あるいは姿態で、子どもにどんな印象づけをしている

か、それは子どもの行動形成―人間づくりにあたって、しばしば決定的な要因となる。ここに無視し得ない重要な教育的契機がひそんでいる。

両親は子どもにとって、最も強い影響力をもった最初の教師なのである。だから私たちは、「親がいかに在るか」にたえず注意を向け、そして子どもの生き方・進み方を、守り育てていってやりたいと思う。

※　※

では、子どもたちは、父親それから母親を、どのような「行動映像の主体者」とらえているのだろうか。父親・母親の行動映像として、ここでは一応つぎのように、21の状態をとりあげてみた。



坐り読み・日本机かチャブ台に向いて坐る

父親の行動映像

▼しんぶんをよんでいるおとうさん
▼本をよんでいるおとうさん
▼いい争いをしている父と母
▼びょうきでねているおとうさん
▼おさけをのんでいるおとうさん
▼ビールをのんでいるおとうさん
▼タバコをのんでいるおとうさん
▼おとうさんとスモウをした
▼おとうさんといっしょにフロに入った

母親についての行動映像

▼しんぶんをよんでいるおかあさん
▼本をよんでいるおかあさん
▼タライでせんたくしているおかあさん
▼びょうきでねているおかあさん
▼ハタキをかけているおかあさん
▼おさけをのんでいるおかあさん
▼ビールをのんでいるおかあさん
▼タバコをのんでいるおかあさん
▼ほうきではいているおかあさん
▼おけしょうをしているおかあさん
▼おかあさんとすもうをした
▼おかあさんといっしょにフロに入った

これらの事項を整理したのがA表である。この表を見ると、子どもの父親・母親に対するそれぞれの、具体的事象に即しての映像度〈印象度ともいえようか〉がよくわかる。

「おとうさん」――このコトバを口にしたり耳にしたりする場合、子どもたちは、それぞれ、いくつかの行動映像のとけこんだ姿で父親を思いえがくのである。「おかあさん」についても同様である。

この表を見つめていると、望ましい父親像・母親像について、いくつかの問題点が指摘されそうである。また問題点というほどではないが、両親の生活流動や変化の傾

向性といったものが、時代的な背景の上にとらえられもする。

つぎに、いくつかの所見を記そう。

※　※

まずどの子もが共通にもっている行動経験をあげてみよう。

父親については「新聞をよんでいるおとうさん」が全部の子にあげられている。つづいて「おとうさんといっしょにフロに入った」がまあ全員と見ていい。父親についてはまずこの二つ。

母親の方は父親にくらべて全員の共通映像が多く、ざっと四つ。それは「新聞をよんでいる」「本をよんでいる」「お化粧をしている」「いっしょにフロに入る」である。

こういう共通映像をふまえて成り立っている話や文章は、子どもたちに理解されやすい。またこのような一般化した普遍的事象をつかまえて絵をかかせたり、文章記述させることを考えたい。子どもに身近で、しかもどの子にも例外なく持たれている経験であるだけに、書きやすいであろうことは容易に想像がつく。

腰かけ読み・イスを使って

※　※

「本をよむ」という行動映像は、母親については全部の子どもがもっているが、父親については8～9割という工合に落ちる。家庭にいて本をよむことが、母親にくらべて一般に少ないという今日の多くの父親の生活の実態が、こんなふうに表われているのだろう。父親にくらべて母親の方がいくぶん読書家、それだけに家庭の中での「もの知り学者」精神的なインテリということもできそうである。母親には、それだけのおちついた時間が与えられやすいという生活の上での事情もあるのだろう。

※　※

いい争い――つまり夫婦ケンカのひとつの状態なのだが、これは6～8割の子が行動映像としてつかんでおり、これはかなり一般化した状態に見られる。

※　※

お酒をのんでいる母やビールをのんでいる母親の映像は、父親のそれと対等化しつつある、といえるほどにふえてきている。ビールをのむ父の映像が89％に対し母親のそれが65％（いずれも男女平均）といった工合にである。家庭内の民主化が風習として一般化していなかった敗戦前は、女性、ことに母親の飲酒はきわめて珍しく、しばしば悪習とさえ考えられていた。それからみると著しい変化である。人間関係の民主化＝女性解放の具体的な現われを見る思い

がする。喫煙の方は昔から、女性にとっても奇異な風習とはみなされていなかったようだ。

※　※

母親の家事の中心的作業は、まず料理・裁縫であり、それから掃除であり、洗濯であろう。その洗濯について、「タライで洗濯をしているおかあさん」を行動映像としてつかんでいるものは、男女児平均して五割。半数の子どもたちはタライを使って洗濯しているおかあさんを見たことがない。今や洗濯という行動はタライと結びつくものではなく、電気洗濯機と直結するものになってきたことを示しているのであろう。このようにして、タライという器物に対する映像も、それからそれを使って働いている母親の映像も、徐々に失われていきつつある。掃除場面におけるハタキとホウキの作業でも、タライ洗濯ほどではないが、やはり、往時にくらべて作業映像の消失傾向が指摘される。即ちハタキをかけている母親の映像をもつ者が男女平均して82％。これは二割ほどの子どもらは、ハタキを使っている母親の姿を見たことがないということを示す。ホウキの方を見ると、男女平均して91％の子どもらが、ホウキを使っている母親を目でとらえているが、一割に近い子どもたちは視覚映像として、ホウキではいている母親の姿をもってはいない。しばらく前までは、ハタキやホウキや雑巾を使うことは、女性にとってごく普通な、常識化した作業であった。日本的な生活風習のなかでの、あたりまえな営みであった。それがである。今日では、母親がハタキやホ

A表　両親の行動映像把握の状態

	映像対象	男	女
おとうさん	新聞を読んでいる	100％	100％
	本をよんでいる	90	76
	病気でねている	45	44
	お酒をのんでいる	90	76
	ビールをのんでいる	81	97
	タバコをのんでいる	81	74
	いっしょにすもうをした	81	44
	いっしょにフロに入った	90	100
父母	いい争いをしているおとうさんとおかあさん	63	83
おかあさん	新聞をよんでいる	100	100
	本をよんでいる	100	100
	タライでせんたくをしている	45	55
	病気でねている	27	58
	ハタキをかけている	90	74
	ほうきではいている	90	93
	おけしょうをしている	100	97
	お酒をのんでいる	27	38
	ビールをのんでいる	54	76
	タバコをのんでいる	63	34
	いっしょにすもうをした	9	34
	いっしょにフロに入った	100	100

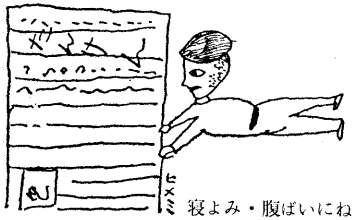
昭和40年9月・7～8歳児・約60名について

寝読み・フトンに横ざまにねる

ウキを使うという行動映像は、すべての子どもたちに共通にもたれるものではなくなってきつつある。それがいいことか悪いことかは論外として、とにかく、あるいは掃除をしない母親、電気掃除機という器械を操作する母親の映像が、とってかわって新しく登場してきていることを認めないわけにはいかない。

※　※

スモウについては大へん特徴的な状態がよみとれる。スモウ――これは親と子どもとが、行動的に交流しあうほほえましいひとつの場面である。



寝よみ・腹ばいにねる

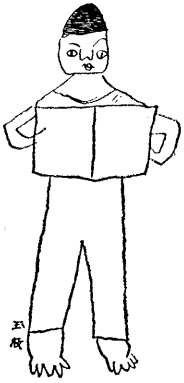
女の子たちは、ほとんどの子がとはいえないが、特に父親と、あるいは母親とというように相手をえらばず、父親とも、また母親とも、平均してふざけあうもののように見られる。女の子が父親を相手にスモウをしたというのが44％、母親とでは34％、父親も母親も、女の子に対しては、いいお相手になりやすい。

ところが男の子の場合には様子がちがう。男の子の場合は、父親を相手にスモウ（らしいからみあいも）をするのが、81％（女の子の場合の約二倍）であるが、力技の相手としては母親（9％）は登場の資格を失ってくる。このように男の子によって、母親が、力技的な遊びの対象、または協力者から除外されるという現象は特徴的である。

※　※

子どもが七才の頃から、母親というものが、子どもの遊びの（それは特定の場面という限定はあるが）場面から姿を消している（消されている）ということは、やはりちょっとさびしい。

（明星学園）


立ち読み

新聞を読んでいるおとうさん

（本文中カット参照）

「おとうさんが新聞をよんでいました」という文を読み、あるいは話をきいた時、子どもらの一人ひとりはどんな情景や姿態を頭の中に浮かばせるだろうか。すべての子どもは、一人の例外もなく新聞を読んでいるおとうさんの姿を認識している。

そこで〝新聞を読んでいる父親〟について、どんな触目映像を、子どもらは獲得しているのであるか、を調べてみた。

一ばん多い姿態は「イスを使っての腰かけ読み」と「すわり読み」とで、ともに11人。つぎは「立ち読み」の5人。つづいて「寝読み」の4人でした。